

彼岸への回路としての祭壇衝立

—— ニュルンベルク、聖ロレンツ教会ヨハネ祭壇衝立をめぐって

秋山 聡

一 はじめに

ニュルンベルク中央駅から旧市街の中心マルクト広場に向かう途中、ペグニッツ川に架かるパールフェーサー橋に至る緩やかな下り坂よりもやや手前、右側に建つ聖ロレンツ教会には、些か奇妙な風情を醸し出す祭壇衝立が残されている。現在、教会の北側廊の周歩廊との境に当たる壁面に設置されている聖ヨハネ祭壇衝立（図1）は、ニュルンベルクでは珍しいルネサンス様式による祭壇衝立ではあるが、今日ではあまり目立つこともなく、人々の注意を引くことはない。しかし一旦、中段中央の半円アーチを有した開口部の格子の向こうに安置されているものに気が付くと、一種異様な雰囲気を感じた祭壇衝立として認識されてくるだろう。というのも、この祭壇の中心を為す場所に、堂々と呈示されているのが、大振りの人骨三本なのだから（図2）。

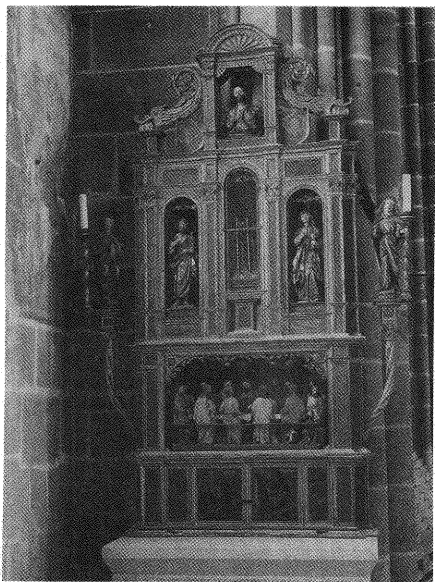


図1 ニュルンベルク、聖ロレンツ教会、ヨハネ祭壇衝立
(現状)、1520/21年(Vetter/Oellermann, Abb.1)

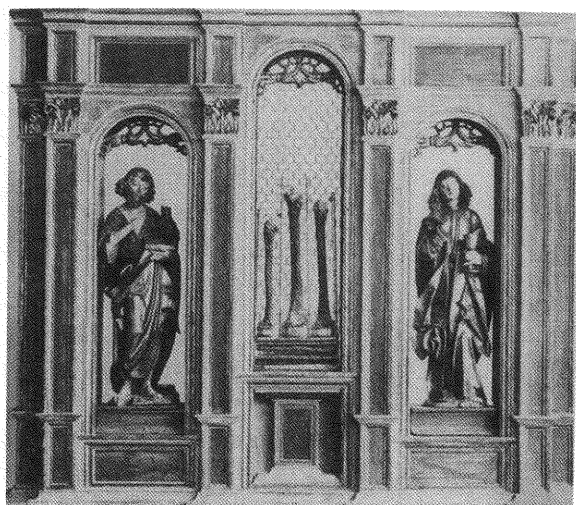


図2 ヨハネ祭壇衝立、中段ニッチ部分
(Vetter/Oellermann, Abb.13)

この現代人にはあるいは禍々しく、猟奇的な印象を与えるかもしれない人骨については、ニュルンベルクでも宗教改革導入後には本来の謂れが早々に忘却されたようで、幾つかの興味深い言い伝えが残されている。ミウルナーの年代記（一六二三年）によると、イムホフ家で黄金の杯が行方不明になり、使用人が盗みの嫌で処刑されたが、その後で杯が見つかり、その無実が判明した。これを悔いたイムホフ家の人々が、聖体安置塔(Sakramenthaus)をロレンツ教会内陣内に建立するとともに、この使用人の遺骨と杯を常しえに記念するた

めに祭壇も築いたというのである。⁽¹⁾ 他にも、やはり無実の罪で処刑されたヴァルトシュトロマー家の使用人の遺骨であるとか、ロレンツ教会の塔の屋根が鍍金された際に、墜落死した金細工師の徒弟の遺骨であるといった風説が残されている。⁽²⁾

いずれにせよ宗教改革の導入以降、人々の聖遺物崇敬に対する記憶が徐々に薄れた結果、この祭壇衝立が異様なものに感じられるようになり、巷間このような伝説が形成されたのであろうが、もとより、これは全く根拠のない臆説に過ぎなかった。これらの人骨については、ミユルナーも認識していたように、⁽³⁾ その身元がはっきりしており、由緒ある聖人たちの遺骨、つまり聖遺物であることが、かつてはニュルンベルクにおいて広く認識されていたのである。宗教改革導入に至るまでは、このような聖遺物としての人骨を肉眼で見ることを、むしろ人々は強く望んでいたのであった。

一 ヨハネ祭壇衝立の構造

ともあれ、まずはこの祭壇衝立(図1)を一通り見てゆこう。⁽⁴⁾ この一五二〇／二一年にペーター・イムホフの寄進により作られた祭壇衝立の躯体は、大別すると上下四部からなる。まず最下部は、当時Salzと呼ばれていたいわゆるブレデッラである。中に聖遺物容器を納めていたものと思われ、開閉する扉を通して出し入れをしたり、錠前による厳重な保管が可能だった。中央左右の扉には二人の軍人聖人が、赤みがかったモノトーンにより描かれているが、向かって左が聖グレオン、右が聖グレゴリウスであることが銘文からわかる(図3)。すなわちテーバイ同盟軍の殉教軍人聖人、いわゆる「黄金のムーア人たち」の指揮官であり、このブレデッラに彼らの聖遺物が納められていることを説明している。⁽⁵⁾



図3 ヨハネ祭壇衝立、ブレデッラ屏絵（左：聖ゲレオン、右：聖グレゴリウス）
(Vetter/Oellermann, Abb.2)

ブレデッラの上には、現在ではテラコッタによる最後の晩餐群像が据え付けられているが、これらの像は十五世紀初頭の作で、先行する祭壇衝立の一部と思われる、これまで専ら一五二〇年に新たな祭壇衝立が制作された折に再利用されたものと考えられてきた。しかしフェッター／エラーマンによると、躯体のこの部分と群像との接合部に齟齬が認められ、これらの群像が一五二〇年の衝立制作時の当初プランにはなく、後になって取り付けられた可能性が高く、当初ここには聖遺物を納めたシユラインが置かれていたのではないかという⁽⁶⁾。この推測は、聖デオカルス祭壇におけるシユライン安置という聖ロレンツ教会内における先例を考えれば、ある程度首肯しうるものと思われる⁽⁷⁾。一五二四年にニュルンベルクに宗教改革が導入された後に、シユラインが聖具室に移され、その代わりに群像が設置されたというフェッター／エラーマンの仮説は、具体的証拠に乏しい憾みはあるものの、祭壇衝立と聖遺物崇敬との中世末期における密接な関係を考慮すれば、興味深い推測と言えよう。

群像のすぐ上、衝立の中央部分については後述するとし

て、先に衝立最上部を見ておくと、中央上部には、左手に天球を持ち、右手で祝福の合図を送る救世主としてのキリスト半身像が置かれている。その左右には、破風の代わりを為すかのようにイルカが配置され、イルカと躯体の間にはそれぞれイムホフ家の紋章が挟みこまれ、この衝立の寄進者が誰であったかを喧伝している。なおイムホフ家の紋章は、他にも躯体の両側面に一つずつ、また前述のプレデッラ扉上の両聖人の脇にも一つ、こちらはヴェルザー家の紋章と対照させて施されている（図3）。後者は一五二二年の両家の婚姻を記念してのことと思われる。

さてこの祭壇衝立の中で、最も異彩を放つのは衝立躯体の中段部分（図2）だが、ここには三つの半円アーチ型開口部（以下、ニッチと略称）が設けられ、左右のニッチにはそれぞれ洗礼者ヨハネと福音書記者ヨハネの像が置かれている。これら左右のニッチよりも一段高みに設けられた中央のニッチには、今日、二重の格子越しに三本の大振りな人骨が見える。このニッチの配置からしても、この祭壇衝立の中で、最も重要な場所を与えられているのが、これらの人骨であることは明らかである。

中央ニッチの中には人骨がむき出しのまま三本置かれているように見えるが、実際にはこの三本はほとんど通常は肉眼では確認できないもう一つの小ぶりの骨片とともに、一つの容器の中に納められている（図4）。この衝立についての寄進者ベーター・イムホフによる支払記録（一五二一年四月二四日付）によると、この半ば壊れかけた容器の制作者は、セバステイアン・リンデナスト（父）であることがわかる。⁽⁸⁾リンデナストは、一五一三年に皇帝マクシミリアン一世から、青銅の鍍金、鍍銀に関する特権を取得しており、当時としては優れた金細工師であった。⁽⁹⁾現在は失われてしまっているが、元々はシリンドラー状のガラス管が三叉上になったタイルの聖遺物容器であったと思われる、現状でもガラス上部の留め金は確認できる。

一四二一年に作成された聖ロレンツ教会の宝物目録の欄外への書き加えによると、「マウリタニア出身で、

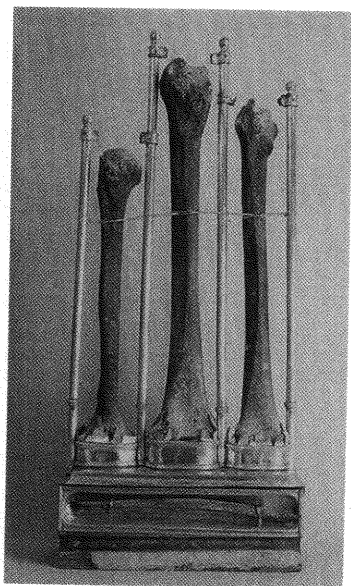


図4
ヨハネ祭壇衝立中段中央ニッチの聖遺物とその
容器 (Vetter/Oellermann, Abb.7)

聖グレゴリウス侯の軍団の聖なるムーア人たちの頭部五つ」やその他の部位の遺骨などが、容器に入れられてヨハネ祭壇に安置されていた。中でも「三本、および小ぶりな一本」は、特別な容器 (Kefelein) の中に入れられており、「ウルリヒ・イムホフがケルンからもたらしたものであり、それについての印章付き書状が付帯されている」とも記されている。⁽¹⁰⁾ここに言及されている書状の原本は現存しないが、その内容は十六世紀にまとめられた謄本集成の中にドイツ語訳を伴って収録されている。⁽¹¹⁾この宝物目録欄外の書き込み中にあるウルリヒ・イムホフがケルンから持ち帰った「三本の骨ともう一つの小さな骨」こそ、衝立の中央のニッチに現存する四本の人骨を指すものと思われる。⁽¹²⁾

なおプレデッラ部分の左右からは、柱頭上に台座を載せたねじり柱が上方へと伸び、それぞれに燭台を携えた天使が据えられている。これらの天使は様式上一五〇〇年ごろの作とみられ、この祭壇衝立に当初属していたものとは思われない。フェッター／エラーマンは、この台座上に、五つあった「黄金のムーア人」の

頭部を収めた頭部形聖遺物容器の内、二つが載せられていたのではないかと推測している。⁽¹³⁾ この祭壇衝立の制作年代である一五二〇年ごろと様式上そぐわない像（最後の晚餐群像と二天使像）が置かれている場所にも、元来は聖遺物容器が安置されていたかもしれないが、そうだとすると、この祭壇衝立は、明らかに聖遺物を保管するとともに、呈示する機能を前面に押し出していた衝立であったことになる。よしんば、必ずしも十分な物証を示さないフェッター／エラーマンの仮説を措くとしても、中段中央のニッチに聖遺物が鎮座していることだからでも、この衝立における聖遺物の比重の大きさは明らかである。

二 神の力のメディアとしての聖遺物

聖遺物とは、聖人の遺体・遺骨、もしくは聖人ゆかりの事物を指し、キリスト教中世においては、社会・文化に無視しがたい大きな影響を及ぼしていた。⁽¹⁴⁾ 民衆にとっては、聖遺物に触れることによって病氣や怪我が治癒すると信じられ、また聖遺物とともに葬られることによって最後の審判時に、聖人の執り成しによって、確実に復活し、有利な裁定を受けられると信じられていた。教会はこのような聖遺物崇敬を両刃の剣のようなのとして、利用しつつも危険視し、管理統制を図っていた。理論上は、聖人の身体には神に由来する特別な力（ウィルトウス＝virtus）が宿り、このウィルトウスが死後の身体にも残り、様々な奇跡を引き起こすと説明された。⁽¹⁵⁾ 聖人の魂は死後ただちに天上に昇り、最後の審判まで「天の祭壇」において待機する一方、聖人の遺体・遺骨は地上に留まりつづける。⁽¹⁶⁾ そしてこの地上に残された身体を通じて、人々は天上とコンタクトを取ることが可能と考えられたのである。しかも聖人の身体にはウィルトウスが偏在しているので、いかに細かく断片化しても、どの断片にも力が残り、奇跡は起きうるとみなされ、遺体の裁断による聖遺物の流布が促進され

た。ある意味では聖遺物は、今日のATMのようなものだとも言えるかもしれない。我々は個々のATMに對峙する際、自分が特定の支店にある自らの口座と取引しているとは一々意識していない。同様に中世の人々も、目の前の聖遺物（例えば腕や指、あるいは歯など）を前にして祈念する際、必ずしも天上の聖人の魂やあるいはそれを介して神と交渉しているとは必ずしも感じておらず、場合によっては命の危険に遭遇した折などに、聖人にですらなく、より即物的に近くの教会に安置されている聖人の身体の一部に救いを求めたりもしていたようだ。⁽¹⁷⁾ いずれにせよウィルトゥスの原理は、聖遺物を神の力のメディアと説明することにより、一般的な宗教実践が如何に多神教的色彩を帯びようとも、理論上は一神教としての体裁を保ちうる巧みなシステムであり、清濁併せ呑む懷の深さにおいて、勢力を伸張させたローマ教会ならではのものとも言えるだろう。当初は聖遺物に触れることが、直接的にその力（ウィルトゥス）に与る手段と見なされたが、中世が進むにつれ、聖遺物を見るだけでも、ウィルトゥスの功德に浴し、救済がもたらされうるという考え方が普及していった。この視覚重視の信心行為は、中世後期、聖体奉挙や贖宥の普及とともに、広く浸透していく。⁽¹⁸⁾ ともあれ、聖遺物は「彼岸との回路」として人々から大きな期待をもつて希求されていたのである。

確かに、このヨハネ祭壇衝立においても、救世主像が最上部に置かれることによって、神への崇拜（アドラティオ＝adoratio）と聖人への崇敬（ウエネラティオ＝veneratio）とのヒエラルキーは守られ、聖遺物の力（ウィルトゥス）の源泉が聖人ではなく、あくまでも神であることが暗示されてはいるものの、聖遺物に対して様々な願いを抱いた一般の人々がそこまで理性的に意識を常に及ぼしていたとは到底思われず、この衝立を目にした一般の人々の関心は、中央の聖遺物へと強く引き付けられたことは疑い得ない。

四 聖遺物と祭壇

ところで今日では忘れられがちなことだが、教会の祭壇はキリスト教中世において聖遺物と極めて密接な関わりを有していた。六世紀末には、祭壇には聖人の遺骨が不可欠なものとみなされるようになり、その結果聖人の遺体ないし遺骨は、序々に祭壇階下の地下墓室から祭壇内へと納めなおされる傾向が強まり、祭壇はメンザ（祭壇上板）の下に空間を有し、側面の扉から聖遺物を納めることが可能となった。⁽¹⁹⁾七世紀初頭には、祭壇の奉献と聖遺物の奉遷（translatio）は不可分な関係を持ちはじめ、⁽²⁰⁾八世紀に至る頃にはさらに、主祭壇だけではなく副次的な諸祭壇にも聖遺物が納められるようになった。⁽²¹⁾カロリング朝以降は、祭壇の奉献儀式の中に聖遺物の奉遷が組み込まれ、聖遺物の奉遷が祭壇の奉献の有効性の決め手となるに至った。⁽²²⁾聖遺物が常時放射するとされたウィルトウスが、祭壇の聖性を保証するものとみなされたと考えれば、この過程はわかりやすいものとなるかもしれない。⁽²³⁾

ところで、そもそも十世紀あたりまでは、祭壇上に事物を置くことは一般的ではなかった。というのも一〇〇年前後までは、典礼において祭壇の両側に人が立つのが普通であったからである。通常教会の東端に設置された祭壇の場合、信徒は祭壇手前、西側に佇立する。これに対して司祭が祭壇の裏側、東側に立つて司式したり、そうでなくとも助祭がこの位置に立つことが多かった。つまり儀式は祭壇を挟んで行なわれたわけで、祭壇上にこの儀式を妨げるような構造物を設置することは不可能だったのである。⁽²⁴⁾

ところが、一つの教会に複数の祭壇が置かれるばかりか、一つの祭壇が複数の聖人に捧げられ、そこに複数の聖遺物が納められることが普通になってくると、それぞれの祭壇の守護聖人の特定が難しくなってくる。そこで必要とされてきたのが、それぞれの祭壇の身元を明示する銘文ないしそれに代わる指標であった。例えば、

一三一〇年のトリリアの教会会議では、祭壇が誰に捧げられているかをはっきりさせるために、祭壇の前か上ないし後ろに彫刻や絵画、あるいは銘文がなければならぬとの決定が為されている。⁽²⁵⁾ こうして序々に、多様な視覚イメージを供えたり、聖遺物を収納した祭壇衝立に活躍の場が与えられる素地が整っていくことになる。

五 アルプス以北における祭壇衝立の歴史的展開

中世後期、ドイツで最も隆盛を極めた祭壇衝立といえ、可動式の翼部を伴った規模の大きな木造衝立（図5、6）であった。聖ロレンツ教会に残る祭壇衝立をみても、ヨハネ祭壇衝立を除けば、大半がこのタイプである。ファン・エイク兄弟のゲント祭壇画やグリューネヴァルトのイーゼンハイム祭壇画などで知られる多翼式祭壇画も、十四世紀末ドイツ語圏を中心に発展した可動翼付き祭壇衝立から派生したものであった。

祭壇衝立の歴史的展開については、ハラルド・ケラーによる聖遺物収納棚からの発展説がこれまで有力であった。十四世紀末まで大切な聖遺物を納入した聖遺物容器は、特製の収納棚に納められた上で聖具室などの通常一般にアクセスが難しい場所に厳重に保管されていた。そして当該聖遺物にゆかりの祝日などにのみ、その棚ごと持ち運ばれて主祭壇に置かれ、特別に公開されていたという。ケラーはこの習慣が発展した結果、主祭壇上に恒久的に聖遺物／聖遺物容器を保管するとともに、必要に応じて公開することが可能な構造を備えた可動翼付きの祭壇衝立が生まれたと考えた。ケラーによれば祭壇衝立は、祭壇上での聖遺物／聖遺物容器の呈示のための格好のメディアであると同時に、聖遺物を盗難から守るための絶好の保安設備であった。

このケラーの仮説は今日に至るまで一定の影響を保っているものの、近年様々な観点から異論が提出されている。⁽²⁷⁾ ここでその詳細を確認するゆとりはないので、ケラーへの反論をノルベルト・ヴォルフの要約に沿っ

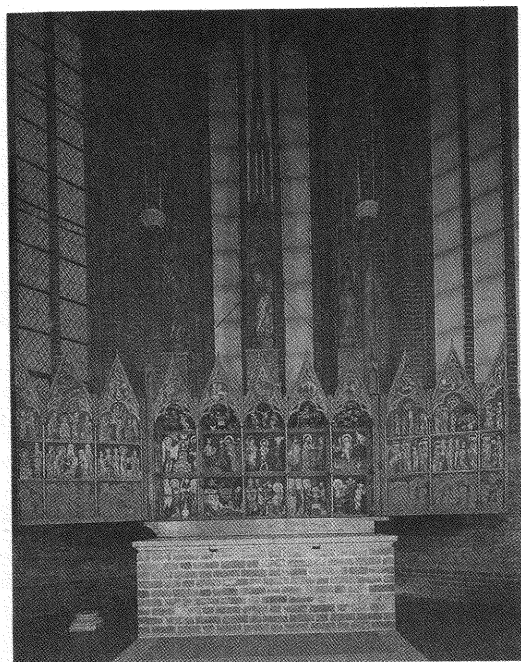


図5 ツィスマール、可動翼付き主祭壇衝立、旧ベネディクト派修道院教会主祭壇、
1310/15年ごろ (Norbert Wolf, *op. cit.*, Abb.11)

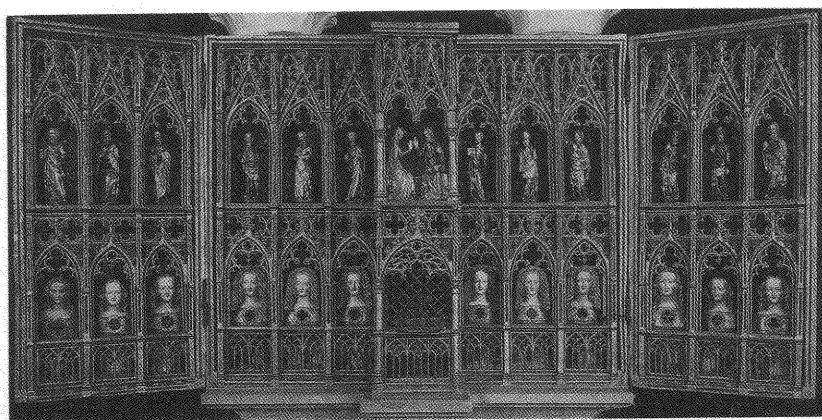


図6 マリーエンシュタット、可動翼付き主祭壇衝立、旧シトー派修道院教会主祭壇、
1350年ごろ (Norbert Wolf, *op. cit.*, Abb.168)

て簡略に紹介するにとどめておきたい。

十四世紀の可動翼付き祭壇衝立において、聖遺物はすでに絶対必要条件ではなく、その存在が認められない場合もあれば、極めて周縁的な位置に安置されるだけの場合もある。そしてまた、聖遺物以上に礼拝像の占める比重が増大の傾向にあり、礼拝像が中心的位置を占める場合も少なくない。むしろドイツ中世後期の祭壇衝立に通底する唯一の共通項は礼拝像であり、可動翼付き衝立は聖遺物よりもむしろ礼拝像の誤用を避けるための防護措置としての色彩が強かった可能性があるという。また、聖遺物の盗難は、中世後期においてそれほど頻繁に起こる現象ではなく、そのための防衛措置が普遍的に求められていたとは考えにくい。実際、祭壇衝立の後壁に開閉扉が付けられ、後方から聖遺物／聖遺物容器を出し入れしていた可能性があるケースも多々ある。またツイスマールの祭壇衝立（図5）のように、聖遺物が置かれるべき場所の後壁にも装飾が施されている場合もある。とすれば、衝立が恒常的な聖遺物／聖遺物容器の保管場所ではなかった可能性が高い。加えて現存する可動翼付き祭壇衝立の多くは修道院教会の主祭壇に置かれていたものが多い。一般の人々のアクセスがそもそも容易ではなく、特別に聖遺物を厳重に保管しなければならぬわけではない。また一般への特別公開がそれほど行なわれたとは思われないケースも多い。こうした点からみて、むしろ宗教儀式における演出として衝立の開閉を有効に活用していた可能性の方が高い。おおよそ以上が、祭壇衝立の機能を主として聖遺物の保管と呈示にみるケラーに対する近年の主だった反論である。

さて、こうしたドイツ語圏における中世後期の祭壇衝立の歴史的展開とその議論を踏まえた上で、ヨハネ祭壇衝立に立ち返ってみよう。まずヨハネ祭壇衝立には可動翼がない。このことよってこの衝立は、ルネサンス様式あるいはイタリア風の祭壇衝立を想起させる⁽²⁸⁾。実際にこの衝立の手法となったのが、ドイツ語圏ではイタリアの影響下にルネサンス様式が最も早く普及した町の一つアウクスブルクで活動していた画家ダニエル・

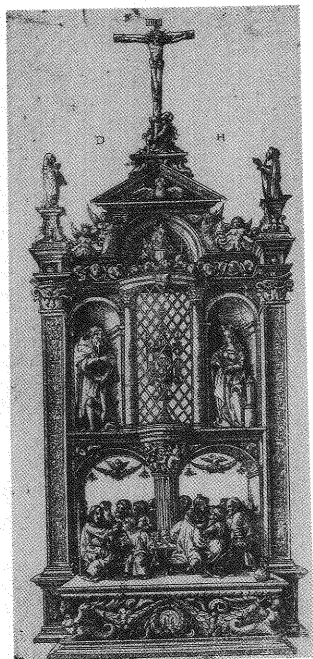


図7
ダニエル・ホプファー、銅版画『聖体安置用衝立』、
ミュンヘン、バイエルン州立版画コレクション
(Vetter/Oellermann, Abb.9)

ホプファーによる銅版画（図7）である可能性が、ラスムッセンによって指摘されている⁽²⁹⁾。イタリアでは祭壇衝立が通常可動翼を備えなかった代わりに、衝立の前にカーテンないしシャッターが掛けられていたことが夙に指摘されているが、ではこのヨハネ祭壇衝立ではどうだったのだろうか。

六 ヨハネ祭壇衝立のシャッター

既に述べたように、この衝立を一見異様なものとしているのは、中央のニッチに半ばむき出しに人骨が呈示されていることである（図2）。聖遺物崇敬が盛んであった中世後期においても、聖遺物たる人骨を常時剥き出しに呈示することはほとんどなかった。実際一二一五年の第四次ラテラン公会議が、聖遺物の剥き出しでの呈示⁽³¹⁾や、盗難、売買を禁じ、管理を強化してからは、聖遺物は厳重な管理のもとで、容器に納められ、

特定の祝日等にしか一般に呈示されなくなった。一方で聖体奉挙の普及につれて増大傾向にあった視覚を重視した信心行為に対応して、聖遺物が人々の目に触れやすくなるような配慮もなされたが、それはあくまでもガラス容器等に入れた上であって、聖遺物が直接むきだしで常時呈示されることは一般的ではなかった。実はこのヨハネ祭壇衝立の人骨も、今日のように常時剥き出しで呈示されていたわけではない。宗教改革導入後、聖遺物崇敬の教義自体が効力を失った末に、今日のような呈示状況が生まれたものであり、宗教改革以前の呈示状況は大きく異なったものだった。では、そもそもこれらの人骨は、どのように保管され、また呈示されたのだろうか。

まず三本の大振りな人骨と一本の小片が、一つの容器に容れられていたことは、既に述べた。ヒルベルトが「ランプ」と呼んでいるように、少なくとも十九世紀前半までは、この容器にはシリンドー状のガラス管が嵌められたままになっていた。今日これらのガラス管が失われてしまったため、人骨は剥き出しとなってしまう（図4）が、三叉形のガラス製聖遺物容器はさして珍しいものではなく、第四次ラテラン公会議での決定が促進剤の役割を果たしたこともあって、十二、十三世紀以降急速に普及したガラス製聖遺物容器の伝統に則ったものといえる。

さて、しかし、ガラス製聖遺物容器自体も、通常は常時呈示されるということとはなかった。当該聖遺物にゆかりの祝日等に特別に公開される以外は、通常人の目からは遠ざけられて厳重に保管されていたはずである。このヨハネ祭壇衝立の場合、中央ニッチの前面に施されている二重の格子は、一七一〇年の改造時のものである。実は元々三つのニッチ全てに、シャッターが設けられていた（図8）。これらのシャッターは、それぞれ左右にスライドして開くタイプのもので、開扉時には躯体内に収納され、シャッターの存在は隠される。一七一〇年に二重格子を設けた段階で、これらのシャッターは躯体内に収納されたまま固定されてしまったために、

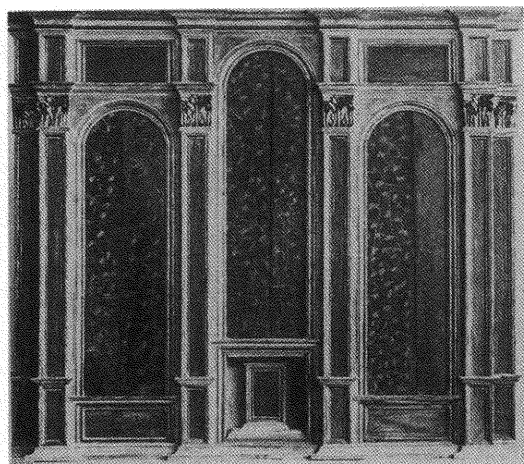


図8 ヨハネ祭壇衝立、中段ニッチ部分、閉扉時 (Vetter/Oellermann, Abb.14)

その存在が、近年の修復時まで忘れられてしまっていたのである。³³⁾つまり、この祭壇衝立は、アルプス以北で中世後期に普及していた可動翼式祭壇衝立とは異なり、可動翼は持たないが、可動翼を必要とするまでもなく、収納型シャッターによつて聖遺物や聖人像を開示／隠蔽する構造を有していたのである。

ちなみに一四七二年の新しい内陣の献堂式に伴う祭壇奉献時の記録に従えば、ヨハネ祭壇は四福音書記者、デオカルス、マウリティウス、セバステアヌスとファビアン、ゲオルギウス、ファイト、ゼーバルトと「聖なる黄金のムーア人」たちに捧げられており、祭壇内には福音書記者ヨハネの式服、聖十字架の欠片、聖ヴィリバルトの長衣に加えて、デオカルス、マタイ、セバステアヌス、ゲオルギウス、ファイト、ゼーバルト、「黄金のムーア人たち」、クイリヌス、ゲルトラウトの聖遺物が納められていた。そしてこれらにちなみ、ヨハネ祭壇における主要な祝日は、聖ファイトの日（六月十五日）、聖ゼーバルトの日（八月一九日）、聖マタイの日（九月二一日）、黄金のムーア人たちの日（一〇月一五日）、聖ゲレオンの日（一〇月一〇日）、聖ルカの日（一〇月一八日）、聖

ファビアンと聖セバスティアヌスの日（一月二〇日）であつた。⁽³⁴⁾これらの祝日に加えて、聖ロレンツ教会にとつてより重要度の高い祝日であつた聖母被昇天祭や復活祭、献堂記念日、さらにはヨハネの日、ペテロとパウロの日、ステパノの遺骨の発見の日、オットーとミヒャエリスの日にも、旧ヨハネ祭壇衝立は開扉された。⁽³⁵⁾一五二〇年に現存する祭壇衝立が新たに完成した後も、一五二四年までの短い間ではあつたろうが、これらの祝日には、プレデッラはもとより、中段のシャッターも開扉され、通常は人の眼から隠蔽されていた聖遺物と聖像が、人々に呈示されたことであらう。

ところで、ヨハネ祭壇衝立が、通常のドイツの祭壇画のように可動翼を備えなかつた理由の一つにはその設置場所との関係があつた可能性が指摘されている。⁽³⁶⁾この衝立は一八三三年まで内陣手前に設置されていたため、可動翼を備えると教会内での内陣への視線を大きく妨げることになつたに違いなく、そのことが配慮されたため、可動翼を備えたタイプは放棄されたというのである（図9参照）。一五二〇年ごろという年代を考えると、必ずしもそうした外的要因だけが可動翼放棄の理由とも断じられず、ニュルンベルクにも及びつつあつたイタリア由来のルネサンス様式の導入という先述した審美的問題も併せて考える必要があるだろう。しかし、いずれにせよ、ニッチに収納型シャッターを設けることによって、可動翼を備える必要はなくなり、可動翼がなくとも、祝日に応じて聖遺物と聖像を開示／隠蔽することが可能なシステムが出現したのである。こうしたシャッターの導入は、宗教改革を迎え、ほとんどその役割を終えつつあつたニュルンベルクにおける可動翼付き祭壇衝立の最後の大きな形式的展開であつたと言えよう。

しかしまたヨハネ祭壇衝立には、可動翼付き祭壇衝立の歴史的展開とは逆行するかのような側面もうかがわれる。ケラー説に対する反論として挙げられる論拠の一つに、祭壇衝立における聖遺物の重要性の低下という論点があるのは、すでに述べた通りである。この観点からすると、ヨハネ祭壇衝立においては、明らかに聖遺

物が衝立の中核を占めており、聖像よりも優位に立っているのは、その構造からみても明らかであり、破格と言える。さらにまた、ホプファーの銅版画が手本になったとすれば、聖体安置用祭壇衝立を聖遺物収納／呈用祭壇衝立に転用したことになり、これまた時流に逆行した試みと言うほかはない。このような一種の逆行的現象の背景には何があったのだろうか。それは恐らくこの祭壇衝立が、都市貴族の寄進になる多分に聖俗両面を併せ持った祭壇衝立であったことと深く関わっているように思われる。

七 聖ロレンツ教会における寄進の競合

一八二三年までヨハネ祭壇が置かれていた内陣手前の中央という位置は、ロレンツ教会内において主祭壇に次ぐほどの重要な位置であり、そこに置かれた衝立は教会を訪れた人の誰しものが否応なく最初に目にするであろうものであった⁽³⁷⁾(図9)。そのためこの祭壇に関わる寄進が、ニュルンベルクの都市貴族にとって、大変名譽なことであるとともに、家門の喧伝に極めて効果的な手段でもあったことは想像に難くない。イムホフ家が一三七〇年に入手した聖遺物を、いつ聖ロレンツ教会のヨハネ祭壇に安置するようになったのか、確固とした手がかりはない。しかし一四一二年の段階でヨハネ祭壇の存在が確認できることから、かなり早い段階でイムホフ家の誇る聖遺物がロレンツ教会の管理に委ねられた可能性がある⁽³⁸⁾。そしてそれ以降イムホフ家は、ヨハネ祭壇に関して独占的とまでは至らないまでも、優先的に寄進をしたり、利用する権利を有していたようだ。ところが一四七三年ごろ、この祭壇の利用をめぐつて、イムホフ家の実質的独占権を脅かすような試みをフォルカーマー家が試みた。フォルカーマー家は聖ロレンツ教会が保有していた聖デオカルの聖遺物に対して一四三七年に新たなシュラインを寄進することで、ロレンツ教会内での寄進者としての存在感を増していたが、こ

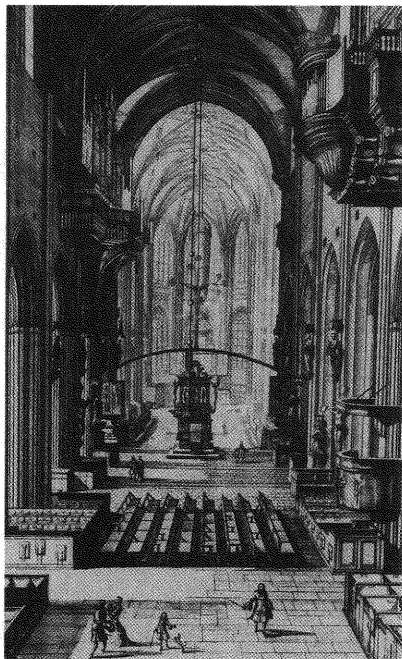


図9
ヨーハン・アンドレアス・グラーフに基
づいたウルリヒ・クラウスの銅版画『聖
ロレンツ教会の内部』(部分)、1685年
(*Reformation in Nürnberg*, Kat.Nr.74)

のシュラインを教会内で一層目を引く場所に安置すべく、ヨハネ祭壇の場所に新たな祭壇を設ける権利を手にしようと、市参事会に働きかけたのである。参事会は当事者間での解決を慫慂したが、結局両家間での合意をみるに至らず、イムホフ家はヨハネ祭壇についての実質的な独占的権利を保持し続けることとなった。⁽³⁹⁾

八 聖遺物の寄進

そもそも中世末期のニュルンベルクにおいて、どのような聖遺物がどのような崇敬を受けていたのだろうか。公的な機関が保有していた聖遺物としては、まず筆頭に「帝国宝物」が挙げられよう。これは神聖ローマ帝国皇帝にとつての正当性の証とみなされており、帝国権標、戴冠式装束、帝国聖遺物からなっていたが、そのほとんどがカール大帝ゆかりの品々か、キリストや諸聖人の遺骨・遺品であったことから、聖遺

物とみなされていた。一四二四年、フス戦争によるボヘミヤ、ハンガリー地方の混乱を背景に、皇帝ジギスムントからニュルンベルク市参事会にその保管が委ねられ、年一回マルクト広場において特別公開されるほかは、聖霊救護院内の聖霊教会に厳重に保管されていた。⁽⁴⁰⁾

これらに次いでニュルンベルグで崇敬を集めていた聖遺物としては、聖ゼーバルト教会の聖ゼーバルトの遺体と、聖ロレンツ教会の聖デオカルの聖遺物があつた。一四七一年に皇帝フリードリヒ三世がニュルンベルクを訪問した折には、皇帝を迎えるために野外に式典用祭壇が設けられ、そこにニュルンベルクを代表する聖遺物としてゼーバルトとデオカルの頭蓋骨を納めた頭部形聖遺物容器が置かれたといふ。⁽⁴¹⁾デオカルスはカール大帝の聴罪司祭で、ヘリーデン修道院初代院長を務めた人物で、身元の定かならぬ聖ゼーバルトとは異なつて、それなりに有名な聖人であつた。バイエルン公ルートヴィヒが帝位をフリードリヒ美公と争つた際、ルートヴィヒ側についたニュルンベルク市に対して、一二三六年皇帝から感謝の印としてデオカルの聖遺物が三九個贈られた際、これらの聖遺物のために銀製のシュラインが作られ、聖ロレンツ教会の十二使徒祭壇上に安置された。さらに一四〇六年、教会の南側廊に新たな礼拝堂が建造され、聖フィリポ、ヤコブ、十二使徒と並んでデオカルスに捧げられた祭壇が設けられた。この祭壇にはアンドレアス・フォルカーマーがさらに入手したデオカルの聖遺物も納められた。一四三七年にはフォルカーマーの寄進により、新たなシュラインが铸造され、聖遺物の謂れと奉遷について記した羊皮紙による文書も納められた。フォルカーマーは、前述したように、このシュラインを安置するための祭壇を新たにヨハネ祭壇の場所に設けようとして市参事会に働きかけたのであつた。聖ゼーバルト教会への対抗意識から、聖ロレンツ教会ではデオカルス崇敬が積極的に推進されていたこともあつて、市当局も出来ればイムホフ家とフォルカーマー家が折り合いをつけることを望んでいた節もある。⁽⁴²⁾

ところで、これらいわば公的な聖遺物とは別に、私的礼拝の色彩が強い聖遺物もニュルンベルクの市民たち

に保有されていた。これらは専ら有力な都市貴族が所有していたもので、代表的なものとしてはムツフェル家所蔵の聖十字架の欠片が挙げられる。市の高官をも務めながら、公金横領の咎で一四六九年に絞首刑に処せられたニコラウス・ムツフェル（三世）は、大変熱心な聖遺物コレクターとして知られたが、その遠因は祖父父母が所有していたこの聖十字架の欠片にあったらしい。ニコラウスが獄中認めた回想記によると、ヴェンツェル王がニュルンベルクを訪れた際に、ニコラウスの祖父で同名のニコラウス・ムツフェルの邸宅に寄宿した。王は女主人バルバラに、礼として何なりと与えようと約束したところ、彼女は一考の後、王が首に常時架けていた十字架の中に納められていた聖十字架の欠片を所望した。王が司祭や金細工師を呼び寄せ、父帝カール四世から譲られたこの聖遺物を切断しようとする、奇跡的にも勝手に完全に分断した、とニコラウスは伝えて⁽⁴⁴⁾いる。この真偽はともかく、このような由緒が正しいと思われた聖遺物を入手したことはムツフェル家にとっては家門隆盛のためにも大きな出来事であったと思われる、早速聖遺物容器を兼ねた銀製の十字架を作らせたという。この十字架は一三九二年の祖父ニコラウスの死去後、聖ディリゲン（＝エギディウス）教会の聖十字架祭壇上に安置されるようになったという。⁽⁴⁵⁾

やがて孫のニコラウス・ムツフェルは熱心に聖遺物を収集しはじめた。その目標は、一年三六五日の守護聖人の聖遺物を全て入手することだった。というのも本人の記すところによると、そうすると一日につき八〇〇日の贖宥が得られるからというのである。既に一四三六年の段階で収集された聖遺物の数は三〇八個にのぼった。⁽⁴⁶⁾ニコラウスは、これらの聖遺物を収納した二つの衛立を作らせ、聖エギディウス教会と聖ゼーバルト教会に安置させた。⁽⁴⁷⁾ちなみにこの後処刑されるまで三三年かかってニコラウスの目標は達成されなかった。彼の罪状の詳細は不明だが、一説には聖遺物収集の資金獲得のために公金横領をしたのではないか、とも推測されている。⁽⁴⁸⁾

それはともかく、ここで興味深いのは、ニコラウスが自らや一族の救済を何よりも念頭に置いて、聖遺物収集に励んだことは間違いないまでも、聖遺物が教会に置かれ、他の人々にも贖宥を初めとしてその聖遺物がご利益を得る可能性を与えていることである。聖遺物を教会に安置するという行為は、祭壇や祭壇衝立、聖遺物容器、聖職祿等を寄進する以上に、広く一般に訴えかけうる慈善行為でありえたものと思われる。

生前に収集し私有していた聖遺物を、当人が晩年、ないし遺族が没後、教会に寄贈する行為はかなり普及していた。ニユルンベルクでも例えば十五世紀初頭、聖霊救護院の世話人であったヘルデゲン・ファルツナーの聖遺物コレクションを、その死後妻が立派な容器をしつらえた上で、救護院に寄贈している。⁽⁴⁹⁾一四四七年にはアルブレヒト・クラッツとその妹が、聖ファイトその他の聖遺物を聖エギディウス修道院に寄贈し、その代わりに兄弟団に加えられている。⁽⁵⁰⁾またその人文主義的学識で知られるゼーバルト・シュライアーも、二二個の聖遺物を購入しており、それを死の三年前、一五一七年にゼーバルト教会に寄贈している。⁽⁵¹⁾

九 ヨハネ祭壇衝立寄進の背景

都市貴族間で寄進が競って行なわれていたニユルンベルクにおいても、世間からの評価の高い聖遺物の寄進は、そうあることではなかった。⁽⁵²⁾イムホフ家が一三七〇年に聖ゲレオン教会から正当な手段で入手した聖遺物を中核に置いての聖ロレンツ教会における寄進行為は、聖エギディエン教会に寄贈されたムツフェル家の聖十字架の欠片を別とすれば、極めてインパクトの強いものであったと思われる。聖ロレンツ教会における一人による聖遺物の寄進としては、他に類例のない事例だったからこそ、他に優先して教会内の特権的な場所に位置する祭壇に関する権利を与えられたのであろう。一五二一年に新たに設置されたヨハネ祭壇衝立(図1)は、

通常の寄進であれば、主として聖人や聖遺物を荘厳するための備品を奉納するに過ぎないところを、崇敬の対象である聖遺物をも譲渡するというイムホフ家によるこの寄進の特殊性を視覚的にも効果的に示していると言える。魂の救済と家門の記憶の存続は当然のこととして、加えて聖人をさらびやかに荘厳して信仰深さをアピールするだけでなく、豪華な寄進によつて消費的顕示を誇るだけでもなく、最先端の美術に対する審美的感覚を誇示するだけでもなく、これらに加えて聖遺物による救済を広くロレンツ教会を訪れる人々に提供することとは、宗教改革直前のニュルンベルクにあつて、一族とその商会の名声の隆盛には極めて効果的な手段であつたことであろう。時代の先端を行く美術様式を示した衝立の中で、時代に逆行するかのようには聖遺物が中核を成すという、ニュルンベルクにおける事例としては破格とも言えるこのヨハネ祭壇衝立は、イムホフ家の寄進における古い信仰と新しい審美観の融合という特殊な複合性を視覚的に体现しているのである。

註

- (1) Johannes Müllner, *Die Annalen der Reichsstadt Nürnberg von 1623*, Hg.v. Gerhard Hirschmann, Nürnberg 1972, p.49.
- (2) Johann Wolfgang Hilpert, *Beschreibung der St.Laurenzer Kirche in Nürnberg 1827*, Hg.v. Georg Stolz, Nürnberg 2001, p.9f.
- (3) Müllner, *op.cit.*, p.50
- (4) Ewald M. Vetter/Eike Oellermann, *Zur Konzeption und Gestalt des Johannesaltars der St. Lorenzkirche in Nürnberg*, in: *Anzeiger des Germanischen Nationalmuseums* 1988, pp.127-150. (以下「Vetter/Oellermann」略称)

- (5) Vetter/Oellermann, p.127ff.
- (9) Vetter/Oellermann, p.134ff, p.142f.
- (7) Eike Oellermann, Der Deocarusaltar der St. Lorenzkirche in Nürnberg, in: *Entstehung und Frühgeschichte des Flügelaltarschreins*, Berlin 2001, pp.231-245.
- (8) Vetter/Oellermann, p.132ff.
- (6) Johann Neudörfer, *Nachrichten von Künstlern und Werkleuten zu Nürnberg aus dem Jahre 1547*, Hg. v. G. W. K. Lochner, Osnabruck 1970, 初出「一八七五」p.37ff.
- (10) Vetter/Oellermann, p.127.
- (11) Ernst Mummenhoff, Reliquien in Nürnberg, in: *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg* 18 (1908), pp.250-256. 特ニp.254f.
- (12) 新たな祭壇衡立の制作に際して「これらの人骨を収めた容器も作り直されたのであろう。それまでのような telelein に収められていたかは判然としないが「telelein (=Täfelin)」と云うからには「何らかの小ぶりの衡立状の容器であったものと推測される。」
- (13) Vetter/Oellermann, p.143.
- (14) 基本的文献として Stephen Beissel, *Die Verehrung der Heiligen und ihrer Reliquien in Deutschland im Mittelalter*, Darmstadt 1976 (初出「一八九〇および「一八九一」」); Peter Dinzelbacher/Dieter R. Bauer (Hg.), *Heiligenverehrung in Geschichte und Gegenwart*, Ostfildern 1990; Arnold Angenendt, *Heilige und Reliquien*, München 1997 を挙げておく。
- (15) Angenendt, *op. cit.*, p.70ff.; p.132ff.
- (16) その根拠としてはしばしばヨハネ黙示録6,9 が挙げられた。辻佐保子, 「祭壇の下殉教者の魂」——連続的説話表現から典礼的図像配置へ——, 『美学美術史研究論集』9 (一九九二), 一—三四頁参照。
- (17) Dinzelbacher/Bauer, *op. cit.*, p.132.

- (18) 救済をもちたし視覚にうつすは' Anton L. Mayer, Die heilbringende Schau in Sitte und Kult, in: *Heilige Überlieferung*, München 1938, pp.234-262参照。
- (19) Joseph Braun, *Der christliche Altar in seiner geschichtlichen Entwicklung*, München 1924, Bd.1, p.556ff.
- (20) Martin Heinzelmann, *Translationsberichte und andere Quellen des Reliquienkultes*, Turnhout 1979, p.27ff.
- (21) Braun, *op.cit.*, Bd.1, p.538.
- (22) Braun, *op.cit.*, Bd.1, p.541ff.
- (23) 十五世紀後半になっても、トルコ軍に荒らされた東欧の教会を再立ち上げる際にヴェネツィア主教が派遣した使節団が最初に行なったのは、荒らされた祭壇を修復し、そこに聖遺物を新たに納めなおすことだった(Rudolf Egger, *Die Reisetagebücher des Paolo Santonino 1485-1487*, Klagenfurt 1997)。
- (24) Braun, *op.cit.*, Bd.2, pp.540-544; Cf. Michael Baxandall, *The Limewood Sculptors of Renaissance Germany*, New Haven/London 1980, p.62ff.
- (25) Braun, *op.cit.*, Bd.2, pp.282.
- (26) Harald Keller, Der Flügelaltar als Reliquienschein, in: *Blick vom Monte Cavo. Kleine Schriften*, Frankfurt a.M. 1984, pp.61-94. (初出 in: *Festschrift für K.Th. Müller*, München 1965)
- (27) 可動翼付き祭壇衝立についての研究史概観にうつすは' Norbert Wolf, *Deutsche Schnitzretabel des 14. Jahrhunderts*, Berlin 2002, p.12ff.に詳し。
- (28) 翼画を有さない祭壇衝立のドイツ人の手になる早い事例としては、デューラーの油彩板絵『ローゼン克蘭ツフェスト』(一五〇六年)が挙げられるが、これはヴェネツィアで制作されたものである。ニールンベルクに安置されたものとしては、同じデューラーの手になるランダウアー祭壇画(一五二一年)がある(平川佳世、「デューラー作《ランダウアー祭壇画》をめぐって」、『西洋美術研究』7(二〇〇二)・二四—四一頁)。
- (29) Jorg Rasmussen, *Die Nürnberger Altarbaukunst der Dürerzeit*, Diss. Hamburg 1974, p.72ff.; Vetter/Oellermann, p.138.

- (30) Alessandro Nova, Hangings, Curtains, and Shutters of Sixteenth-Century Lombard Altarpieces, in: *Italian Altarpieces 1250-1550*, Oxford 1994, pp.177-199.
- (31) Angenendt, *op. cit.*, p.162.
- (32) Hilpert, *op. cit.*, p.9.
- (33) Vetter/Oellermann, p.140f.; p.144.
- (34) Walter Haas, Die mittelalterliche Altaranordnung in der Nürnberger Lorenzkirche, in: *500 Jahre Hallenchor St. Lorenz zu Nürnberg 1477-1977*, Nürnberg 1977, pp.63-108. 特ニ p.97f.
- (35) Haas, *op. cit.*, p.68
- (36) Vetter/Oellermann, p.139.
- (37) モントセランの位置について Haas, *op. cit.*, p.76f.; p.90参照。十七世紀のロレンツ教会内部を描いた銅版画について *Reformation in Nürnberg*, Nürnberg 1979, Kat. Nr.74参照。
- (38) Haas, *op. cit.*, p.83.
- (39) Vetter/Oellermann, p.131f.
- (40) 拙稿「如何にして、この気高き帝国の聖遺物が呈示されたのか」『西洋美術研究』10 (二〇〇四) 所収。
- (41) Oellermann, *op. cit.*, p.239.
- (42) Oellermann, *op. cit.*, p.239; Vetter/Oellermann, p.134. なお復活最後の水曜日には、デオカルスの子エラインを担ぐの祝典的な行列が一五二四年まで教会の周辺で執り行なわれた。
- (43) ニコラス・ムッフェルの生涯について G. Hirschmann, Nikolaus Muffel, in: *Fränkische Lebensbilder*, Bd.3, pp.50-68参照。
- (44) Gedenkbuch von Nicolaus Muffel 1468, in: *Chroniken der fränkischen Städte: Nürnberg*, Göttingen 1961, p.742f.
- (45) *op. cit.*, p.743f.
- (46) *op. cit.*, p.745.

- (47) Ernst Mummenhoff, op. cit., pp.250-256.
- (48) Hirschmann, op. cit., p.62ff. なお獄中回顧録によるとそれまで手元に置いておいた聖遺物を、ゼーバルト教会のシュテファヌス祭壇をはじめ、クララ教会、パールフューサー教会、聖霊救護院教会……等に寄贈することを述べ、それぞれの教会でも、エギディエン教会の聖十字架祭壇におけるのと同様の贖宥が得られることを誇らしげに記している(Gedenkbuch, op.cit., p.745f.)。
- (49) Karl Schlemmer, *Gottesdienst und Frömmigkeit in der Reichsstadt Nürnberg am Vorabend der Reformation*, Würzburg 1980, p.337f.
- (50) Mummenhoff, op.cit., p.256.
- (51) Elisabeth Caesar, Sebald Schreyer. Ein Lebensbild aus dem vorreformatorischen Nürnberg, in: *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg* 56 (1969), pp.IX-213, 特にpp.139-142参照。 Cf. Schlemmer, op. cit., p.338f.
- (52) 中世後期における美術作品の寄進について Caroline Horch, *Der Memorialgedanke und das Spektrum seiner Funktionen in der Bildenden Kunst des Mittelalters*, Königstein in Taunus 2001, p.52ff. および 聖ロレンツ教会に於ける様々な寄進について Corine Schleif, *Donatio et Memoria. Stifter, Stiftungen und Motivationen an Beispielen aus der Lorenzkirche in Nürnberg*, Berlin 1990 (特にp.228ff.) を参照。

(あきやま・あきら 東京大学大学院人文社会系研究科助教授)

Retabel als Pfad zum Himmel

Form und Bedeutung des Johannesaltar der St. Lorenzkirche in Nürnberg

Akira Akiyama

Der Johannesaltar(1520/21)der St. Lorenzkirche in Nürnberg zeigt heute ein merkwürdiges Aussehen. In der mittleren Öffnung befinden sich Knochen, die angeblich die Reliquien der heiligen goldenen Mohren sind. Ursprünglich konnte man jede der drei Öffnungen des Altares durch zwei dünne Brettern an der Vorder- und Rückseite schliessen. Mit diesen Brettern wurden die Reliquien und die Statuen normalerweise verhüllt, und nur an besonderen Festtagen dem Publikum gezeigt. Weil durch diese Bretter die Verhüllung/Enthüllung möglich war, brauchte der Johannesaltar keine Flügel mehr, wie bei den üblichen Retabel des späten Mittelalters im transalpinen Raum. Damit konnte Johannesaltar, trotz seiner traditionellen Funktion als Reliquienaltar, einen in Nürnberg neuen Renaissance-Stil gründen. Die Motivationen der Stiftung des Johannesaltars von Peter Imhoff waren einerseits die Promotion der Reliquienverehrung und andererseits die Demonstration seines Geschmacks am neuen künstlerischen Stil. Da nach der Einführung der Reformation kein neuer Altar mehr in Nürnberg hergestellt wurde, bleibt Johannesaltar als Unikum.